

熊野古道を 歩く

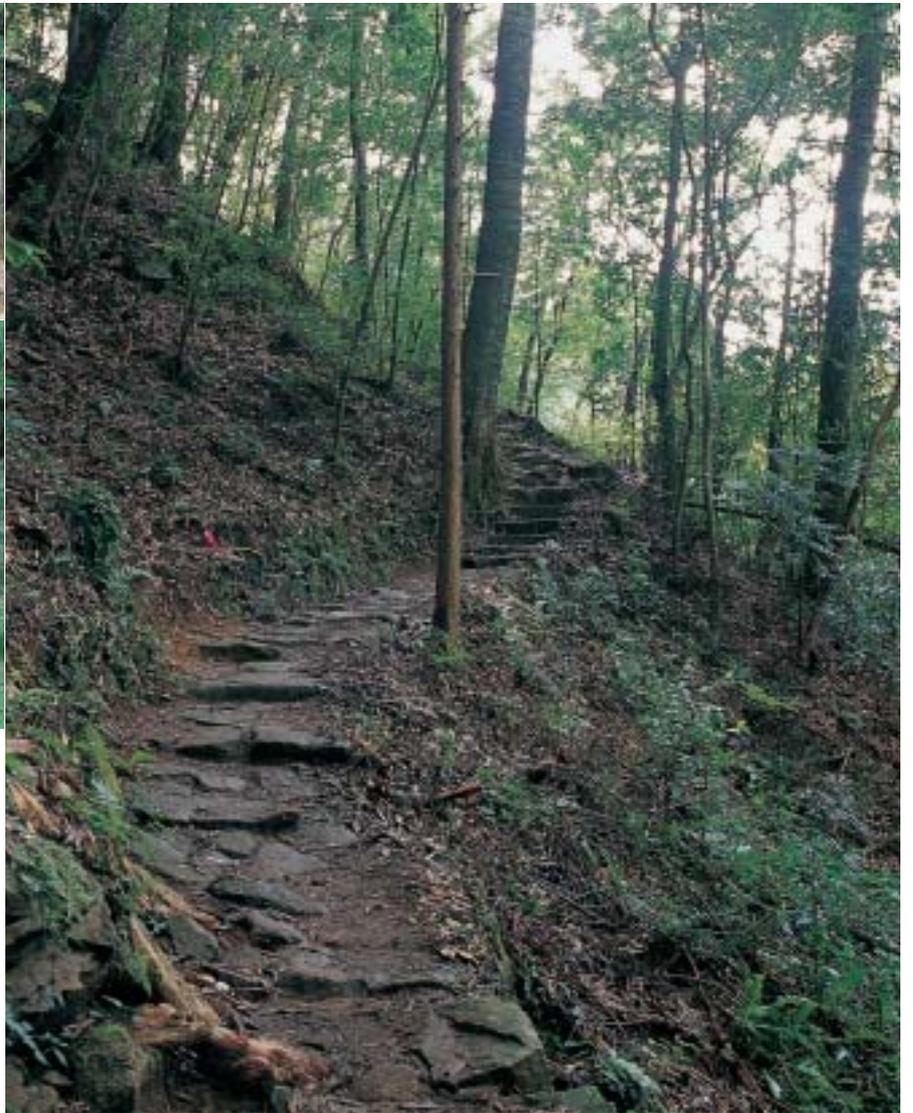
2004年7月に、
日本で12番目の世界遺産として登録されたことで話題の
「紀伊山地の霊場と参詣道」^{ミケの伊勢}。
「熊野三山」、「吉野・大峯」、「高野山」の三霊場と
それらをつなぐ参詣道で構成されているが、なかでも、
古くから山岳信仰の対象として知られる「熊野三山」と
それらを結ぶ巡礼の道「熊野古道」は、
日本人の信仰、そして旅の原点として、注目を浴びている。
日本のなかでもっとも人間の行き来を拒む地のひとつ・熊野を歩き、
その原点を見つめる。



伊勢路・松本峠付近にて。
木々が陽光を遮り、道の勾配と石畳を覆う苔が歩行の自由を奪う。
耳には、その苔を踏む足音と、風に揺らされた葉がこすれ合う音しか入らない。
この異様な雰囲気、自然への畏怖の念を抱かせる。

奈良時代から山岳宗教の地として、
多くの人々が参詣に訪れていた熊野。
紀伊半島の南部に位置する熊野は、
全体が深い森におおわれ、その神秘的な
空間は、古くから自然信仰の対象であ
った。

熊野を訪れたのは、修行者だけでな
い。都から参詣に来る上皇や貴族も多
く、後白河上皇が34回、後鳥羽上皇が
28回も訪れたという記録も残っている。
その後、熊野信仰が次第に地方に広ま
ると、「蟻の熊野詣」と呼ばれるほど、
全国からの巡礼者が増えた。それほど
多くの巡礼が行なわれたのは、熊野が
高野山などの山岳寺院と異なり、「浄・
不浄」、つまり、身分や性別、障害の
有無に関係なく、あらゆる人を受け入
れていたからだといわれている。体調
や体の障害から参詣が困難な人も、沿
道の人々の助けを得て熊野三山を目指
したのだ。なお、熊野三山とは、「熊
野本宮大社」「熊野速玉大社」「熊野那
智大社」のこと。この3つの大社は熊
野詣の最終目的地であり、その周辺一
帯は聖域として崇められていた。



上 中辺路の起点であり、広い意味での熊野の聖域の入口でもある滝尻王子社。全部で99ある王子のなかでも格式の高い五体王子のひとつである。
下左 滝尻王子社の脇にある、中辺路の起点を示す道標。
下右 滝尻王子社の左側から杉林の中を走る古道。急勾配の道は露で湿っていた。すれ違えないほど道は細い。

熊野三山へと続く巡礼の道「熊野古道」にはさまざまなルートがあるが、上皇らがもっともよく使っていたという「中辺路」を歩き、熊野本宮大社を目指すことにした。

「滝尻王子」の鳥居の前に立つと、これから熊野詣が始まるのだという心地よい緊張感が生まれてくる。社を覆うように生い茂る杉の木立、視界を遮る山々、その谷間を流れる富田川……。緊張するのは、自分が熊野に抱かれていることを実感するからだろうか。

滝尻王子は、熊野三山の聖域がはじまる場所として知られている。熊野を目指した人々は、横を流れる富田川の水で身を清め、熊野三山への思いを新たにしたという。ちなみに、王子とは古道沿いに設けられた社のことだ。熊野権現の分身とされた場所で、現在も約100の王子社やその跡が残っている。

本宮大社へと続く古道は、社の裏手からのびていた。木々の間をぬうように苔むした石段の道が続く。「道を歩く」なんてものではありません。登山するつもりできちんと準備をしてくださ

滝尻王子から100mほど登ったところ。中央やや左に、赤いリボンが見える。この先、このような目印がないと、道とはわからないほどの険路が延々と続く。

い」とは地元の人言葉だが、それが決して大げさではないことを早くも実感する。足場が悪いため、雨が降ろうものなら、命がけの旅にもなりかねない。

石段はすぐになくなり、獣道のような格好になる。ときおり、木の枝に赤いリボンが結ばれているのは、迷わないようにつけられた目印。こうした道標が必要なほどの山道といえば、その険しさを想像していただけるだろうか。生い茂る木々に遮られて、昼間であるにもかかわらず辺りは暗く、その独特の雰囲気には畏怖の念さえ覚える。

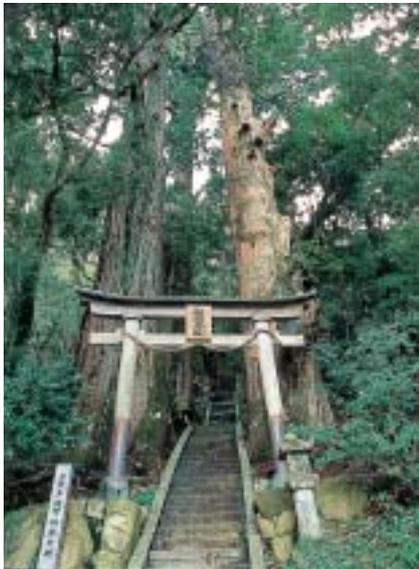
次は、滝尻王子から富田川沿いの道を東へ進み、箸折峠へ向かう。滝尻王子からここまで山道を歩くと5時間ほどかかる。

箸折峠は、991年に熊野詣を行なった

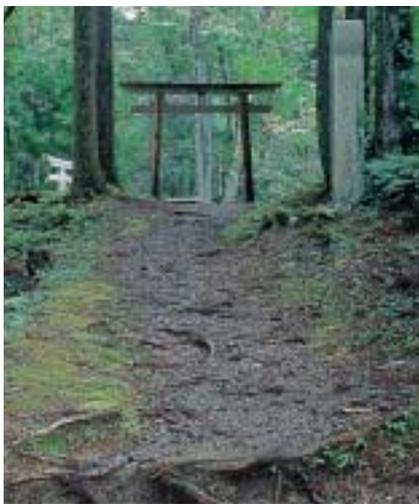


箸折峠付近にたたずむ、牛馬2頭にまたがった牛馬童子像。

という花山法皇の逸話のある場所。法皇がここで昼食をとる際、萱を折って箸にしたことが、その名の由来だという。中辺路のシンボルともいえる「牛馬童子像」も、法皇の旅姿を模したものと伝えられている。



継桜王子。鳥居の後ろに一方杉がそびえている。王子社の隣には、江戸時代の面影を残す「とがの茶屋」があり、いまでも中辺路をいく人々が体を休める。



五体王子のひとつ、発心門王子。ここから熊野本宮大社までは、比較的ゆるやかな下り坂が続く。

ここから先、本宮大社までの中辺路には、名所が豊富だ。たとえば、名水百選に選ばれた「野中の清水」や、熊野那智大社の方向、つまり幹の南側の枝だけが伸びている「一方杉」のある「継桜王子」、熊野本宮大社の聖域への入口とされる「発心門王子」など。古道をすべて歩けなくても、途中こうした名所に立ち寄れば、往時の熊野の姿が浮かび上がってくる。

さらに山道を東へと進むと、森に遮られていた視界が急に開け、ふと眼下に熊野の森が見えた。ここは「伏拝王子」。見晴らしがよく、山々の向こうに熊野川も見える。いよいよ聖地・本宮大社に近づいたという気持ちになってきた。1889(明治22)年の大洪水により現在の場所に移築されるまで、熊



伏拝王子からの眺め。幾重にも重なる山の向こうに熊野川の中洲がかすかに見える。かつて熊野本宮大社があった場所・大斎原である。

野川の中洲にあった本宮大社を眺めることもできたという。この伏拝王子から本宮大社までは約4kmの下り坂で、30分ほどで行くことができる。

本宮大社に到着すると、貫禄ある巨大な木の鳥居が迎えてくれた。鳥居をくぐり、158段の石段を登りきると、正面に檜皮葺の社殿が現れる。これは水害で倒壊をまぬがれ、現在の場所に移されたもの。往時の姿をとどめた社殿の周囲には厳肅な空気が満ち、その美しい佇まいにはため息がこぼれる。



熊野本宮大社の神門から社殿を見る。門の向こうには、古色蒼然とした4つの社殿が東西に並んでいる。



湯煙があがる湯の峰温泉街。有史以前に発見されたと伝えられている温泉で、600年ほど前の東国の武士・小栗判官の蘇生伝説でも知られ、いまでも多くの参詣者が入湯に訪れている。

本宮参拝後は、本宮からほど近い「湯の峰温泉」に立ち寄った。ここは1800年の歴史を持つ日本最古の温泉ともいわれ、熊野詣の参拝者が身を清める「湯垢離場」でもあった温泉街だ。湯の谷川の両側に古風な温泉宿が並ぶこじんまりとした街は、安らぎに満ち、ひなびた風情がある。

湯の峰温泉の名物は、湯の谷川の中にある「つぼ湯」と呼ばれる共同浴場である。その名のとおり、3人も入れればいっぱいになる小さな壺のような湯船が特徴で、小栗判官と照手姫の伝説でも有名だ。現在は、温泉水を使った料理を出す旅館も話題になり、古道を歩く人々の癒しの場としてだけでなく、温泉ファンの間でも人気を集めている。湯は皮膚病や胃腸病に効果があるとされ、しっとりしていながらもとろみのない、さらりとした肌触りが心地よかった。



熊野速玉大社へと至る伊勢路の風景。この先を登り切れば松本峠。



上 松本峠を越えると目の前に広がった七里御浜。
下左 松本峠。杉林と竹林のなかに地蔵が立っている。この地蔵を鉄砲撃ちが妖怪と間違えて撃ったという故事が伝えられ、その傷も左裾に残っている。
下右 道が険しいため、熊野古道の至る所にこのような杖が置いてある。

熊野三山の残りの二つ、熊野速玉大社と熊野那智大社へは、紀伊半島の東側、三重県熊野市に移動し、伊勢路経由で訪ねることにした。

伊勢路は、伊勢神宮からいくつもの峠を越えて紀伊長島に至り、そこから海岸線に沿って速玉大社のある新宮まで続く古道である。海岸に沿っているといっても、海岸線ぎりぎりまで山地が迫った紀伊半島においては、険しい山道が続く。現在の熊野市内、「花の窟神社」の辺りまでは、いくつもの峠を越えなければならない。

伊勢路は、数ある熊野古道の中でもとりわけ石畳が発達した古道が多い。その中のひとつ、松本峠付近の古道を歩いた。松本峠の入口は、海岸からほど近い、民家のわきにある。古道に入ると早くも急な坂が続く。今度は道沿いに用意されている木の杖を借りることにした。熊野古道には、至るところにこうした杖が置かれている。用意なく古道歩きにやってきた旅人への心配りは、うれしいかぎりである。

杖に助けられても、やはり足場の悪い急勾配の道はけっこう疲れるものだ。途中、熊野灘に面して約25km続く七里御浜を見渡せる展望台でしばし休憩。峠までは30分かかった。竹林が茂る峠には、大人の背丈ほどある大きな地蔵が佇んでおり、薄暗い林の中に突如現れるその姿に驚く。古道を歩いていると、時折こうした地蔵を見かけるが、森への畏怖の念から旅の安全を願って置かれたのであろう。

峠越えて心地よい疲れを感じた後は、熊野灘を左に眺めながら、海岸沿いの道を新宮方面へ。ここから速玉大社までの古道は、内陸に入ることもあるが、大半は浜の上である。途中には、咆哮する獅子の形をした「獅子岩」や、イザナミノミコトを葬った場所として『日本書紀』に記されている、高さ70mの巨岩を御神体とした「花の窟神社」などの見所もある。ごつごつした岩のあるダイナミックな海辺の景色は、中辺路で目にした無限に連なる



上 熊野速玉大社。1883(明治16)年に、花火が原因ですべての社殿が焼失した。朱色が華やかな現在の社殿は1953(昭和28)年に再建されたもの。
下左 巨岩自体を御神体とした花の窟神社。イザナミノミコトはこの岩の洞窟に葬られたと伝えられている。

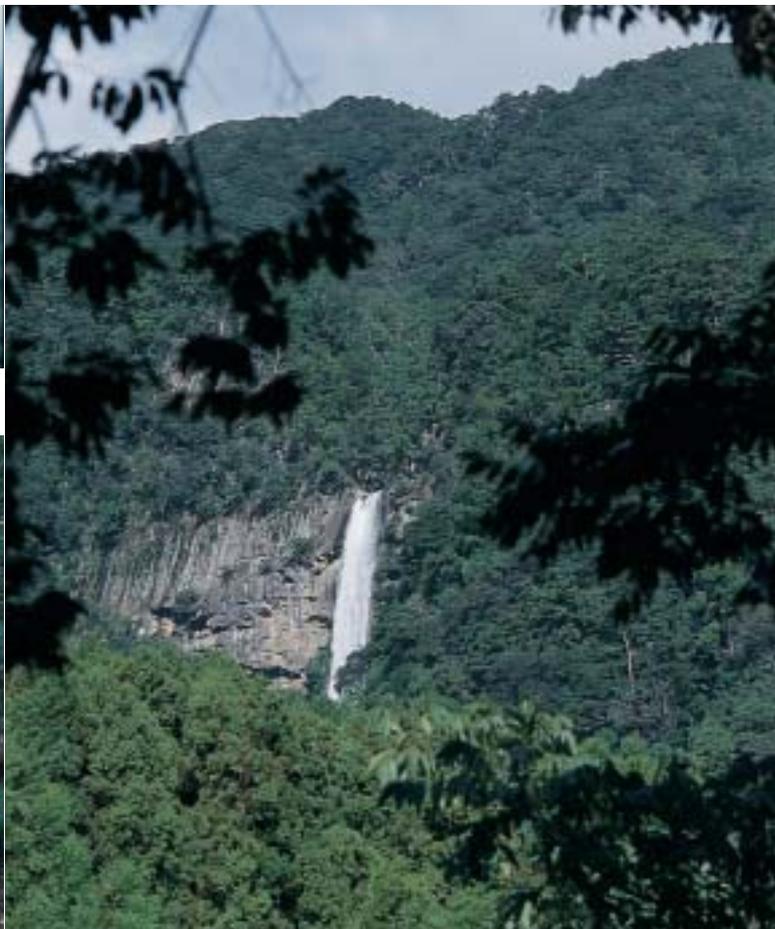
山々と並び、熊野を代表する風景といえよう。

二つ目の目的地、熊野三山のひとつ、熊野速玉神社は、熊野川の河口近くにあった。古道を歩けば、松本峠から7時間近くかかる。

熊野速玉大社は、朱塗りの社殿がひときわ鮮やかだった。参道には平重盛

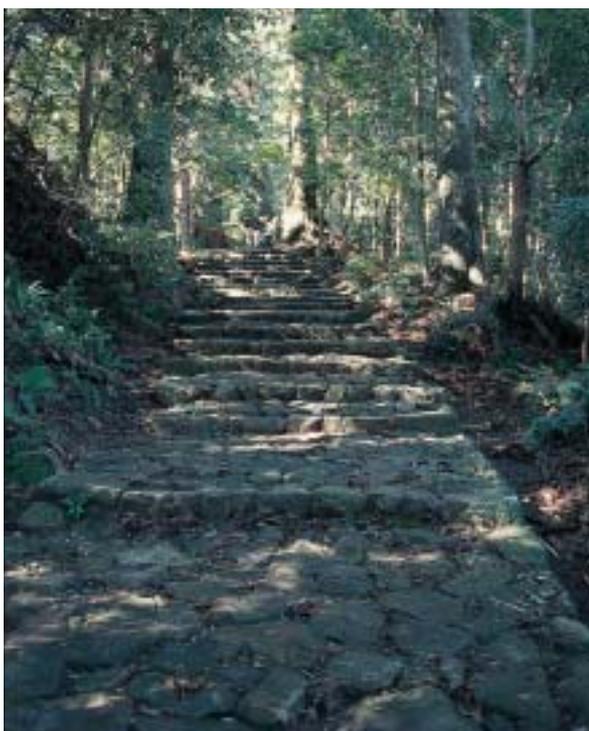


那智山の中腹からの眺め。山々が雲海に沈んでいた。周辺の樹木はほとんどが原始林である。



上 大門坂の途中でふと見えた那智の滝。ここからは水の音も聞こえる。落ちる水の姿が神々しい。

下 熊野那智大社。熊野原始林の深い緑を背後にして、鮮やかな丹塗りの拝殿と5棟の社殿が立つ。



杉木立の間に石畳がきれいに敷き詰められた大門坂。大門坂を登り切り、さらに表参道の473段の急な石段を上がると熊野那智大社に着く。



が植えたという樹齢800年のナギの老木が立ち、苔むした燈籠は時の流れを感じさせる。

最後の目的地である熊野那智大社へは、海岸沿いをさらに南へ。そして、JR那智駅のすぐそばにある浜の宮王子（熊野三所大神社）から海を離れ、内陸へと入る。浜の宮王子は、参詣者が那智へ向かう前に、潮水で身を清める「潮垢離」を行なった場所だ。

ここから那智大社までは、峠越えもなく、比較的歩きやすい道なので、古道歩きを楽しむ人も多い。とはいえ、2時間以上かかるので、それなりの覚悟は必要である。

熊野速玉大社から熊野那智大社までの古道のハイライトは、苔むした石畳

で有名な大門坂だ。入口には、「夫婦杉」と呼ばれる2本の杉の老木が、門のように両脇にそびえる。坂の全長は500m。高低差は100mほどあり、短いとはいえ、油断できない坂道である。この道は、かつて通行税が必要であった。見事なまでに石をきれいに敷きつめた道は、いまでいうと最先端の舗装有料道路といったところか。坂の途中から那智の滝を拝むこともでき、はるばる熊野本宮大社、熊野速玉大社を経てここに辿り着いた巡礼者たちは、えも言われぬ感動を覚えたに違いない。この滝は、弘法大師や花山法皇が修行をしたことでも知られる憧れのご神体であったのだから。

大門坂の上には、滝を祀った「飛瀧神社」と熊野詣の最終目的地である

「熊野那智大社」、西国三十三所観音霊場の一番札所「那智山青岸渡寺」があった。周囲に広がる鬱蒼たる原生林、133mもの落差を持つ滝、険しい山の上にもかかわらず、当時の技術を集めて造られた重厚な社……。そこは、聖地にふさわしい、澄んだ空気で満ちていた。

上皇たちが通っていた時代は、京都から20～30日の日程で行なわれていたという熊野詣。その足跡をたどり、森を歩く旅の中で強く感じたのは、熊野の森の放つ圧倒的な存在感だ。想像を超えた自然の偉大さは、この地に信仰が生まれたことの必然性を強く実感させるものであった。